

くるまづか
車塚遺跡

所在地 岡崎市岩津町車塚地内
(北緯35度0分46秒 東経137度10分23秒)

調査理由 道路改良工事(主) 岡崎足助線

調査期間 平成22年10月～平成23年2月

調査面積 2,300㎡

担当者 池本正明・石井香代子・鈴木恵介



調査地点(1/2.5万「豊田南部」)

調査の概要 調査は、県道岡崎足助線道路改良工事に伴う事前調査として、愛知県建設部から愛知県教育委員会を通じて、愛知県埋蔵文化財センターが委託を受けて実施した。

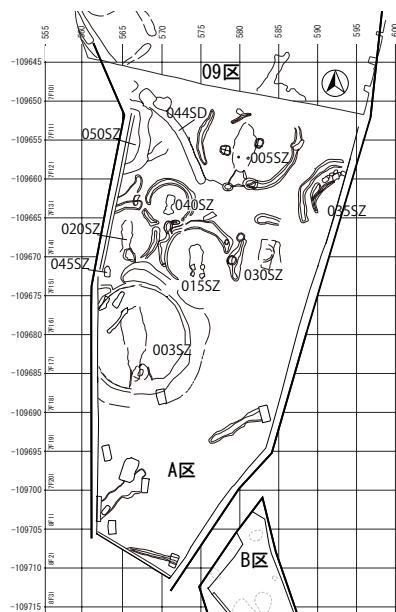
車塚遺跡は、矢作川左岸の天神山より、北西に伸びる丘陵が南西向きに屈曲した標高40m～50mの台地上に位置する。台地の西裾には御所川が巡り、川を隔てた西側の丘陵上に東郷遺跡、その南の中位段丘上(碧海面)に於御所遺跡が存在する。転じて車塚遺跡東方の天神山から伸びる各丘陵上や天神山山腹には岩津古墳群、天神山古墳群、車塚古墳群、八ツ木古墳が存在し、周辺には多数の6世紀代から7世紀代の古墳が確認されている。

今年度の調査区は、09区に南接した区域であり、丘陵の南に面した斜面に位置する。調査対象区はL字を成し、L字の垂直部分をA区、水平部分をB区と呼称した。調査はB区・A区の順に実施した。主な遺構はA区側、09区に南接する部分に集中し、縄文時代・弥生時代後期・古墳時代後期の遺構・遺物が確認できた。

縄文時代 A区斜面部分の表土より石鏃3点を確認した。表土中の出土であることから、近現代の耕作等によって表出したと考えられる。今回の調査では縄文時代の遺構は確認できていない。

弥生時代終末期～古墳時代初頭 弥生時代終末期～古墳時代初頭の遺構は溝1条、方形周溝墓1基が確認された。いずれもA区北西端に位置し、09区で検出された遺構の連続、あるいは並列部分である。溝(044SD)は検出段階での長さ14.5mを測り、09区で検出された1011SDに連続する。方形周溝墓(050SZ)は、調査区の西際で検出され、墳丘東側の溝と幅約1m分の墳丘を検出した。墳丘部分は幅が約1.3mの溝で囲まれ、墳丘部分の長辺は7.1mを測る。主体部等は確認できない。

古墳時代後期 古墳はA区北半部の丘陵上に集中して検出された。円墳7基、方墳1基、合計8基の古墳を確認した。いずれの古墳も石室下部や周溝の一部を残すだけの状況である。003SZは墳丘裾に列石を2～3段残存する、墳丘の直径約13.5mを測る円墳である。石室は奥壁と側壁の一部を欠く、推定長約7.5mの胴張り複室構造を持つ。過去に調査された類似の石室は、岩津2号墳と平面形状、規模ともに似ており、003SZよりや



車塚遺跡10区平面図(1:750)

や大型の石室では平面形状の似る石室に石田2号墳、中ノ坂9号墳がある。出土遺物は、石室内で原位置を保っていたものは無いが、実施中の石室内土壌洗浄では長頸鏃の茎部破片が数点検出されている。また、石室の前庭部分に掘られた攪乱から7世紀末と考えられる須恵器高杯、杯蓋が出土しており、こちらは墓前祭祀の可能性も考慮する必要がある。005SZは墳丘直径約11.5mを測る円墳で石室平面形は胴張り単室構造である。奥壁付近から7世紀代後半と考えられる須恵器杯蓋・杯身が出土した。025SZは墳丘径約10mの円墳で、墳丘の西半分を調査区内で確認し、石室はほぼ調査区内に収まる。石室内から管玉3個、勾玉1個が出土した。030SZでは北・西辺の周溝を検出したが、いずれも周溝の内側が直線的であり方墳の可能性がある。墳丘規模は不明で、石室は敷石と西側壁の一部を残す。石室内からの遺物は土師器長胴甕1点のみ。西側の周溝からはハソウ、直口壺等が出土したがいずれも7世紀代と考えられる。015SZ、020SZ、040SZ、045SZはいずれも小型の円墳と思われる。径は約4mから9mを測る。040SZと045SZは再葬を目的としたいわゆる小石室、015と020は胴張り形単室の石室である可能性がある。

総括 今回の調査では弥生時代後期の方形周溝墓1基、古墳時代後期の古墳8基等が検出された。09区北半部では弥生時代後期の方形周溝墓、古墳時代後期の古墳とそれぞれ同時期の建物跡が多数検出されているため、近接する建物群と墓域という評価が可能である。古墳群としての位置づけは、同じ丘陵に属する車塚古墳群、同様に天神山を起点とする別の丘陵上に築かれた岩津古墳群や天神山の頂上から山腹にかけて築かれた天神山古墳群も含めた広範囲の評価が必要と考えられる。(鈴木恵介)



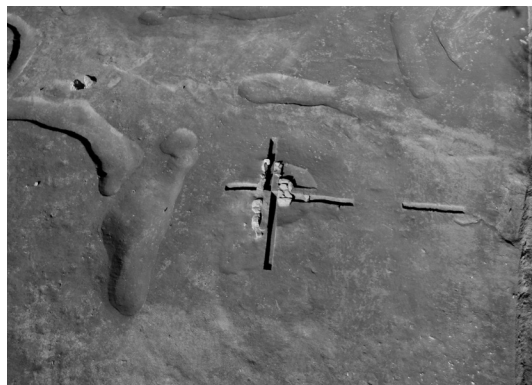
車塚遺跡10区全景写真(背後は天神山)



中央が胴張り単室構造の005SZ



003SZ列石(墳丘南面部分では1段のみ検出)



方墳の可能性がある030SZ